

輝く“ふくろい”まち・ひと・しごと創生会議

地方創生 やらまいか通信 vol. 176

輝く未来へ今、袋井が動き出す！～挑戦するDNAを呼び起こせ～

発行日：平成31年3月22日
発 行：袋井市総合戦略室

見守りサービス

「どこニャン GPS BoT」実証実験

「どこニャン」は、専用のIoT端末を携帯するお子さまや高齢者の現在位置情報や、1日の行動履歴を、離れた場所にいるご家族に、スマートフォンのアプリケーションを通じて正確かつリアルタイムにお伝えするサービスです。



— 01 現在地だけでなく、移動履歴もひと目でわかる。

アプリを開いた瞬間に、最新の現在位置が読み込まれています。
過去1週間分の移動履歴も確認できます。

GPSやWi-Fiアクセスポイントを使って正確な位置情報を表示します。



スマートフォンアプリを通じて、いつでも離れたお子様の居場所を確認！

登下校だけでなく、放課後のお出かけの「見守り」でも

— 02 出発・到着などを自動でお知らせ。 (プッシュ通知機能)

画面を見続ける必要はありません。
学校や塾などを登録すればアプリが登録地点の出発・到着を自動でお知らせします。



ICTを活かしたまちづくり

市と中部電力株式会社は、すべての市民が安心・安全に暮らすことができる社会の実現を目指し、「スクールガードボランティア制度」などをIoTによって補完することで、子どもから高齢者までのゆるやかな地域見守り体制を構築する実証事業を実施しました。



大石隆之主任主査（左）に教わりながら見守りシステムの利用方法を確認する保護者＝2月中旬、袋井市

袋井市GPSで見守り強化

袋井市が地域ぐるみの見守り体制構築に向けた実証実験を実施している。対象とする子どもに衛星利用測位システム（GPS）機能付きの小型端末を所持させ、普段と異なる行動を察知する。今後高齢者も対象に行う予定で、子どもから高齢者までを一括して見守るシステムが構築できれば県内初という。見守りボランティアの負担軽減へ早期の実用化を目指す。

3月末までの実証実験は市立山小の1、2年生約40人が参加。GPSの移動情報を人工知能（AI）が行動履歴として分析し、上下校時の足取りに異常があれば保護者のスマートフォンに通知が届く。

高齢者も視野、一元化へ

袋井市が児童や高齢者の見守り体制強化を図る背景には、地域ボランティアの減少や負担増が挙げられる。

上下校児を見守る「スクールガードボランティア制度」には昨年5月時点で約600人が登録。しかし減少傾向で、高齢化も進んでいるといふ。

高齢者対策も同様だ。「はいかいSOSネットワーク事業」の協力事業所は19年1月時点で131事業所。自治会や警察と連携し行方不明者の保護へ情報を共有しているが、見守りの対象者が近年増え、ボランティアの負担軽減が急務だ。

一方で利用者のプライバシー保護については、情報を開示できるのが見守り依頼者のみとすることで個人情報が流出しないよう細心の注意を払うといふ。ただ、見守りボランティアを含めた保護者以外の地域住民といかにして情報共有を図るかが課題といふ。

子どもに端末配り 実証実験

行動を把握することで、徘徊（はいかい）対策にもつなげる。

市によるべく児童や高齢者の行動を把握するシステムは他自治体でも構築されているが一元化されていないとう。両者に注意を払いいたいものの、家族や見守りボランティアの負担が大きいとの指摘があった。

市IC下街づくり課の大石く。長女が参加中の会社員後藤佳澄さん（37）は「仕事のため帰宅時に家にいないことが多く、子どもの安全が分かつて安心できる」と歓迎する。高齢者の実証実験は50人程度を対象に2019年度に実施予定。離れて暮らす家族が

市IC下街づくり課の大石隆之主任主査（44）は「共働き世帯の増加で四六時中子どもに付いていられず、何かあつた際にすぐ駆け付けられないケースが増えている。高齢化にも備える必要がある」と強調する。

（袋井支局・伊藤龍太）

ボランティアの負担軽減急務